

今まで読んだ民俗学の本の中に、“遠野物語”という言葉がたくさん出てきた“柳田國男”という名前もたくさん出てきた、いちど読まねばと思いつつ読まなかった。“はじめに”で“遠野”という土地、坂上田村麻呂蝦夷征伐の時代からの土地だという。教科書で習ったことがある名前、すなおいに蝦夷征伐と思いついていたが、征伐などとはいやだねえ、大和政権が、家来にならない東北の豪族を征服するために攻めていった、「おのれ国賊め、すなおいに朝廷のことを聞け」ということなのか、そんな単純なことでもないのかもしれない。甲斐からきた“南部家”がそのまま山形県のこの地方に居座ったそうだ。遠野という地方にはそれ以来の旧家・名家が残っているそうだ。読んでみると「懐かしい 昔 聞いたことがある話 そうしたことだったのか」ということがたくさん出てくる。

◎座敷童衆の話：遠野の旧家には座敷童衆という名の、一種の神が住んでいる家があるといわれている。この神は折々人の前に姿を現す。多くは十二三歳ぐらいの子供の姿をしているという。この神が宿る家は富貴自在、富も出世も思いのままといわれている。実に姿のよい娘が二人浮かぬ顔で歩いてくるのに出遭った。「おまえたちは どこから来た」娘たちは声をそろえて「山口の孫左衛門のところからきた」「これから 何処其処村の 何某のところへ行く」とこたえた。「この娘たちは 人ではない 孫座衛門の家もこれで終わりだ」それからまもなく孫座衛門の家は滅んだ。

◎河童の話：遠野の川には河童が多く棲んでいる。河童は人を孕ませる。夕暮れ、男の妻がふらふらと川のほうにいき、ニコニコと笑っていたという。翌日の昼にも娘は川のほうにいきうずくまって笑う。やがて妙なうわさが立った、村の何某という男が夜な夜な通っているというのである。はじめは夫の留守を窺って通っていたが、しだいに間が詰まり、しまいには夫が横に寝ているというのに通ってきて情を交わすようになった。なぜか防ぎようがなかった。一族郎党が集まって娘を守ったがなんの甲斐もない。やがて娘は懐妊した。その赤ん坊には水掻きがあった。河童の子だった。名は伏せるが豪農で、士族であり村会議員もつとめたことがある家の話だ。

◎狼の話：向こうの峯より何百という狼の群れが押し寄せてくるのが見えた。嘉兵衛は恐ろしさに耐え切れず、急いで近くの樹の梢に上がって身を縮めた。足下の樹の側を夥しい数の狼が走り過ぎていく、その足音だけが聞こえていた。狼たちは北へ向かった。それよりのち、遠野郷の狼は、甚だ少なくなったという。

◎オシラサマという神：あるところに貧しい百姓がいた、妻は早く亡くなったが美しい娘がひとりいた。馬が一頭いた。娘は馬をいたく可愛がり、夜になれば厩舎にいつて一緒に寝た。そしてついに娘と馬は夫婦になった。馬は大切な家畜だが、人と馬とが契るなど許されない。父は煩悶し、懊悩したあげく、馬を木にくくりつけ殺した。娘は馬に取り縋ってなき悲しんだ。父は娘を狂わせた馬が憎く、斧で馬の首を切り落とした。その首は娘を乗せ天に消え、オシラサマという神になった。

◎オクナイサマを祀る：多くの幸がもたらされる。阿部家は多くの田んぼがあったが、田植えの人手が足りず困っていた。どこからともなく背の低い小僧がひとり現れ、田植えを手伝わせてくれといった。子供だからたいした役には立つまいと思いつつ、ありがたいことなのでお願いしたら、これがよく働く。昼になり昼飯を振舞おうとすると姿が見えない。また田植えを始めると小僧が現れ働いている。なかなか上手に一日中働いてくれた。お礼に晩のご飯をご馳走しようとしたが姿が見えない。仕方なく家に戻ると泥の足跡が縁側から黒い神棚まで続いていた。祀られたオクナイサマの腰から下が泥で汚れていた。

◎山人の話：遠野は山に囲まれ、その山々の奥には山人が棲んでいる。山人は人に似た形、姿をしているが、人ではない。峠を越えようとするものは、山中にいたって必ず山人出遭うのだそうだ。その道筋には山男や山女がいるのだ。それは恐ろしいものであるらしい。出遭ったものは恐れ戦き、話を聞くだけでも怖かった。あるとき恐ろしく背の高い男が、急ぎ足で山を登ってくるのに出遭った。薄暗かったせいか、色は黒く見えた。目はきらきらと光り、肩には麻で織ったような古い、浅黄色の風呂敷で包んだ小さい荷物を背負っている。それは恐ろしかったという。この刻限に山のほうに登っていくということ自体、普通ではない、ありえないことだ。どこへ行くかと声をかけた「向こうへ」といいながら上っていく、まるで方角が違う、男はまもなく姿が見えなくなった。「山男だ」だれかが叫びその途端に怖くなった。人のいないような山奥で出会う男女、足が速い、大きい、服装も髪型も里のものとは違う、悪い奴、怖い奴、里の女、子供がさらわれて、何十年もして山で出遭ったり、帰ってきたり、という話もあったそうだ。

柳田國男がいつている「この類の書物 今 喜ばれるものではないだろう」明治43年に発刊された“遠野物語”この時代の空気が感じられる。「魅力的な土地を訪ね 奇妙な話を聞き 得た見聞を 語りたい」「これが説話集なら 今昔物語 これにつながるものか」「この話は おとぎ話 怪談話 ではない 事実として語られている話 村人によって語られた話を そのまま書いている」今は岩手県の釜石線、海岸から30キロほど内陸に駅がある。

同じ頃、金田一京助が北海道でアイヌの人たちと会っている。西洋文化を取り入れろ、西洋に追いつけ、そんな時代に、東北、北海道の“民族・風習”にうつつをぬかす自分に自嘲的なところが見えるのもおもしろい。先日“ゲゲの鬼太郎”の作者“水木しげる”が亡くなった。あの漫画の登場人物たちがダブって見えてくる。

死人と会う話：土淵村役場の助役、北川清の家が火石（ひいし）にある。北川家は代々山伏で祖父は学者だった。清の弟の福二が海岸の船越村田ヶ浜に婿入りした。しかし先年の大津波（海嘯）にのまれ家屋敷と妻子を失った。福二は生き残った二人の子供と屋敷跡地に小屋を建て暮らしていた。夏の月夜用便に起き、遠い便所まで浜を歩いた。霧の中に人影が浮かんだ。影の主は寄り添った男女だった。福二はわが目を疑った。女のほうは津波で亡くなった自分の妻だった。そして妻とともにいる男は、福二と結婚するまで妻が心を寄せていた男だった。その男は同じ里に住み、お互いに心を通わせていて、福二の婿入りがなかったら、夫婦になっていたかもしれない間柄だった、と聞いていた。だがその男も津波にのまれてしまっていた。二人とも死人である。福二はいったんやり過ごしてから、思い直してあとを追った。もしかしたら妻は生きていたのかもしれないと思った。相当時間あとを追った末、声を張り上げて妻の名を呼んだ。二人は立ち止まった。やはり妻だった。妻は驚くでもなく「わたしは今 この人と 夫婦になっています」「そんな勝手なことを 子供たちが 可愛くないのか」妻は顔色を変え泣いた。二人は消えていった。福二は夜明けまで道端に立って思いをめぐらせ朝になって帰った。そのご福二は久しく病みついたそうだ。

死のときの話：飯豊の菊池松之丞が傷寒（急性発熱性疾患）に罹った。呼吸困難になり苦しみながら、菩提寺の青笹の喜清院に行こうとした。急がねばとあせり、力がはいり、走るように、浮くように菩提寺に向かった。門をくぐると芥子（からし）の花が咲き満ち、何処までも続いている。花の中に亡くなった父が立っていた。なおも進むと幼くして亡くなった子どももいた。「こんなところに いたのか」と近づくと「今は 来ては いけない」という。門の辺りで松之丞を呼ぶ声が聞こえる。いやいやながら引き返したところで正気に戻った。彼岸に逝きかけた松之丞は生き返った。

山神の話：山口から柏崎（宮城県）に行くには愛宕山の裾野を廻るのがよい。その愛宕山の山頂に祠が建っている。その途中にひとつのお堂があり、お堂の前の石塔には、山神の二文字が刻まれている。その場所は昔から山神が顕現すると言いつえられている処なのである。和野の何某という若者が夕暮れに参詣口に差し掛かった。堂の前を横切ろうとしたとき、愛宕山の上のほうから人が降りてくるのが見えた。ずいぶんと大きな人である。誰だろうと、立ち止まって林の樹林越しに様子を窺った。この近在にあんなに大きな人はいない、誰だろうか確かめようと、若者は木陰に歩み寄った。丁度道の角の処でばったりと出会ってしまった。先方も驚いてまじと見下ろした。若者も先方を見上げた。その人の顔は真っ赤だった。目は爛々と輝いている、驚いて目を丸くしているので余計に輝いて見えた。「山神だ」若者は後ろも見ずに柏先の村まで一目散で逃げた。

遠野物語はまだまだ続く。100年前の日本、都会と田舎の格差は大きかった。田舎に行けば江戸時代の日本が残っていた。今の日本人には想像もできないほど政治体制・生活・想い・考え方が、違っていたと思われる。都会で西洋思考を学んだ少壮学者が東北の田舎町に行き、時間をかけてその土地に残っている話・物語・伝承・伝説・宗教を語られるままに記録した。その後、幾多の人が、幾多のところで、このような記録を続けおもしろい民俗学ができあがった。できあがったというのは、もうほとんどの話が吸い上げられた。今は時代が変わりすぎて日本全部が金太郎飴のように同じ色になってきた。まだまだたくさんある古文書を掘り起こす作業が続けられ、おもしろい話が出てくるかな・・・。

河合雅雄先生の話：河合隼雄（はやお）はこの先生の兄弟だとか、丹波笹山の人だとか。京都大学霊長類研究所の先生と聞いて、もしやと思いだす昔話。ガハク中学生ぐらいの年頃に両親と弟の4人家族で箕面の山にハイキングに行った時、猿をてなづけていたおっさんがいた、ちょび髭をはやしたその人は子どものオレにも学者先生のように見えた、あの時見たおっさんは河合雅雄に間違いのないと思っている。箕面の猿は迷惑な猿だった、ヒトの持っているおやつや弁当を奪いに来る、威嚇する、女こどもに乱暴する、車の屋根を乗り移り傍若無人に走り回っていた。今なら「自然にまかせよう 野生動物に 餌をやってはいけない 野生動物に かかわってはいけない」というようなことが普通になっているが、50年前動物の研究をするには「まず 近寄って 接して」なんてことでてなづけ餌をやっていたのかもしれない。「いくら研究でも そのあと みなさん 猿のことでは 迷惑したのだ」といいたい。

先生：自然破壊という言葉が使われだしてから久しい。自然にそむかれては大変、仲良くしなければと、急に「自然と共生」という言葉がもてはやされるようになった。「動物との共生」「人と人との共生」「地域、地球との共生」と安易に使われているきらいがある。共生は複数のものが一緒に在ることをいう。共生は一般には、異なるものがお互いに利益を与え合っている関係をさしてつかわれる。元々生物学の用語で、シンビオシス（symbiosis）の訳語。マメ科植物と、根にコブを作り共生する根粒バクテリア、バクテリアは窒素を固定して根に与え、植物は光合成で生産した炭水化物を分解しバクテリアに栄養分を与える。アリとアリマキの関係では、アリはアリマキから分泌する蜜をもらい、そのお返しにアリマキを外敵から守ってやる。こうした“相利共生”は生物界でたくさん見られる。ところが植物はアリマキから樹液を吸われっぱなし、何も得ないどころか害を与えられている、一方が利益を得て他方が利益を得ないとか、害を与えられるのを“片利共生”という。またアリマキには寄生蜂の幼虫が寄生する。一般的に宿主と寄生虫は、片利共生の関係にある。

共生という目で見れば、人と自然はどういう関係にあるのか。人類は600万年前に誕生し、それ以来ずっと狩猟採集の生活をしてきた。人間は肉食獣の位置にあった。自然とは相利共生の関係にあったといつてよい。そして道具製作などの文化を持っていたから、自然・人・文化が一体となって生活していた。ところが今から一万二千年前に農耕牧畜という新しい生業が始まってから、自然との関係が一変した。自然に依存してきた人間は自然を改革し破壊して利用し、食物を生産するという技術を開発し、文明社会への道を拓いたのである。それは人間の画期的な富と幸福をもたらした。しかし一方では自然破壊の第一歩を踏み出すことになった。つまり、このことによって人間は反自然的な存在としての立場を明確にしたのである。文明社会になってからの人間は、自然から無限の恵みを与えられながら、自然に対してなんのお返しもししていない。人間と自然との関係は、自然から一方的に利益をもらう片利共生の関係にある。そして、大地も大気も水系も汚染し、無数の生物を農薬使用で殺してしまった。人間は自然の寄生虫的存在になり下がってしまったといえる。人間は自然の資源を利用しなければ生きていけない。そんな時、母なる自然の恵みを受け育てられているのだという謙虚な気持ちと、自然への畏敬の念をしっかりと持っていなければならない。それを失って「自然の征服」とか「自然を意のままに動かす」という思い上がった気持ちを少しでも持っておれば、必ず自然から手痛い懲罰を受けることになるだろう。母なる自然は、けっして甘くない、寄生虫的存在を排除しようとするのは、自然の摂理である。

これを読んで「よくぞいってくれました オレも そう思う 上手く表現できなかったが まさにその通り」と拍手喝采しているところ。生物学者の先生が「共生」という言葉を利用して、人間の生きかた、衣食住の話、自然との付き合いかたを説いておられる。「何もいらない ほんのすこしあればいい」なんて思いつつ、オレのまわりはブツで満たされている、ところせましとブツが並んでいる。これは恥ずべきことなのだけれど、何一つ手放せない、なくなれば明日に困る、明後日に困る その翌日に困る、と俗っぽいことをほざいている。先生が言うように、人間もひとつの生物として、生きること、ただ生きること、これだけで生存すればよかったのかもしれない、考える力、文明を生み出す力、これが素晴らしいものだということを否定してみる、できないがこれはおもしろい。

卦体という言葉「けったいなこと」「けったいなやつ」 仕様という言葉「しょうむないこと」「しょうむないやつ」と大阪人はいう。最近、気になること「これは けったいじゃないのかな」「しょうむないこと なんて 申し訳ないが」ということで、身の回りの話を披露しますが、皆さんはいかが思われますかね。

国産の話：我が家の家電製品が続けてふたつ潰れた。パナソニック製のレコーダー、3年前に3万円で購入したものが半年ぐらいかけて徐々におかしくなり、終に潰れてしまった。メーカーに送ると「ハードディスクが潰れている 技術料含め2万かかる 修理しますか」といつてきた「3万円で新品が買える 3年使用したものに 2万円つぎ込み 何年使えるやら」ということで修理を断ったが、新品を買うにはいたっていない。もうひとつ、家族が NEC 製パソコンを買ったが3ヶ月で作動しなくなった。同じようにメーカーに送ると「モニターが 潰れている」ということで無料修理をして本体は帰ってきた。友人が「有名ブランドだけど 外国製じゃないのかな」という。パナソニックやNECは日本の有名メーカーのはずだがほとんどの製品を近隣の外国で生産しているらしい。この場合は日本製なのか、外国製なのかという不思議な話になってくる。中国人がたくさん日本観光にやってきて「日本製じゃないとだめ」とたくさんものを買って帰る“爆買い”という言葉がよく聞かれる。「製品の裏に 生産国の名前が かいてあるのかね」といままさらながら驚く。オレにとって多少豪華な買い物、たかだか3万円6万円と笑われるかもしれないが、こんなに早く潰れてしまっは、「次回 このメーカーは 信用できない」ということになるのではないのかな。それでは同じ品物を日本で生産すればいくらで造れるのか、日本で作れば3年では潰れないよということになるのか、いずれにしろ、ものを造らない国民になってしまっはいいのか。目先の金に右往左往しているのではないのか。

日本語訳：50歳の頃に始めてパソコンに触れた。解説書を読んで「保存・削除・切り取り・挿入」というような日本語にとまどった。元来の外国語がそのまま使われている言葉「コピー・ペースト・フォント」の方が安心すると思っは、20年経ってみると、これらの日本語も外国語も同じように身体になじんでしまっは奇異感がなくなっはしまっはいる。これらの言葉の日本語訳、国語の専門家、街の評論家、若者たちならたんに外国語の直訳ではなく、もう少しスマートな言葉を考へたのではないのかなと思っは。前回の当ブログで共生の話、“共生”という言葉は共存などと長年聞きなれて違和感はない。共生は生物学の先生の直訳らしいがおまげがあっは、お互いに得をする、片一方だけが得をするという場合の“相利共生”“片利共生”という言葉をはじめて聞きおおいに違和感がある、もう少しスマートな言葉がなかつたのかと頭をひねる、これも経年で解決するのかもしれないが。オレがよく言う言葉に「四半世紀も経てば、外国人でなくなる 本人はまだまだ 外国人だけれど その子はまったく同化している 日本に来る人も 外国に行く人も 皆さん その国の人になっはしまっは」人も言葉も文化も時が経てば違和感がなくなる。

民族・民俗の話：わが住まいの近くに国立民族学博物館がある、万博の大きな敷地の中にある。今は無くなつたが隣に国立国際美術館があつた。現代美術を中心に展示、いとこがそこにいた頃には足しげく通つた、そのついでに民博も覗いた。外国のオドロドロシイお面・槍や弓というような武器・お祭りの様子などが展示されてた。50歳代までは、おもしろいものが飾られた博物館ぐらひに思っはいたが、民俗学の本を読むよになつて、民族学と民俗学は違ふのだということを見出した。おおざっぱに言へば、民族学は、世界の民族の歴史・文化・言語・宗教・生業といった話。民俗学は、日本の民間人の風習・習慣・生活・文化の話。こういへば「それは あまりにも おおざっぱすぎますねえ」と怒られそう。日本も世界もいつもいよように“金太郎飴現象”どこに行つても同じよんな大都会、道も、電車も、ビルも同じよになつてきた。少し田舎に行くと昔からの人たちが住んでるが、都会近郊というこで都会人と変わらない生活様式になつてきていてつまらない。この現象は外国も日本も同じよに思へる。とくにTVが発達してどこの誰が何をしてるという情報、ネットが発達して地球の裏側でも瞬時に音声や画像が聞かれる、見られる、「便利で 素晴らしい世界」といつていいものか、「もつと 別の景色 別の考へ 別の生活 別の価値観 色々なところがあるようがいいよねえ」といつのがいいのか、オレは金太郎飴はいやだねえ。

一昨日、いつもの仲間と京都の山に登りに行った、京都市内とはいえ曲がりくねった峠道を、川を超えて行ったその帰りのこと「オレ 運転します」と帰途についたが、2回ほど通行止めに会い、というのは、前日もそうだった、がけ崩れかもしれないと引き返したことを思い出しながら「京都周りで帰ろう」と車を走らせていた。白い雨合羽を着た人に車を止められ「こちらへ」と誘導されてきょとんとしていると「免許証を持って こちらに来てください」「やや スピード違反で 捕まったのか 彼らは警官か」とわかった「あちゃー」である。「この道路は制限速度が 40 キロですが このとおり 60 キロを出しておられました 罰金が乗用車ですと一万五千元 一週間に以内に 銀行か郵便局で お支払いください コンビニはだめです」「あなたは優良運転手さんですので 以降3ヶ月の間 違反等が無ければ この違反の履歴は消え もとどおり 免許証は優良運転手さんです」「3ヶ月間 なるべく注意して 運転してください」署名捺印し請求書もらった「どこに 行ってこられました」「その山は どこから 入るのですか」というような会話が終わって無事開放された。正直な話「はらがたつ」「くそお〜」という気持ちはまったくなく「ついにオレも 違反切符をもらったか」と思いながらも、「これですんでよかった たった一万五千元を払うだけ 違反の履歴も 3ヶ月間なにもなければ 元に戻る これだけで終わってよかった」と思った。事故や事件に巻き込まれ、怪我や死亡だということにでもなれば長い時間と大きなお金が身にふりかかってくる、本当にこれですんでよかったと胸なでおろした。ただあの道へは横からはいったばかりで、40キロの標識は見えていなかった、山間部の幹線道は普通50キロなんだけれどと不思議に思ったが、そのまま運転しながら見ているとその道はずっと40キロだった。「二千円つつカンパしますよ」と8000円をいただき、罰金はさきほど郵便局で支払ってきた。

いつも言っていることだけど「戦争、争いの原因は パワー・宗教・民族」だと思っている。今もあちこちで戦争、内戦、弾圧、テロ、自衛という、名称こそ違え殺人・殺戮がおこなわれている。ニュースでしか知らない知識だが、現在一番盛んに戦っているのは中東方面、イスラム教信者の一部が“IS”とか“アルカイダ”という組織を作って、自分たちと違った考え、行動の人たちに対して攻撃をおこなっている。国同士の戦いならば高性能な武器をたくさん持っている、戦争技術にたけている、欧米の軍隊が優勢なのは決まっているが、ISやアルカイダという連中はゲリラ戦法、テロ攻撃、隠密行動、忍者作戦という方法で戦闘しているので簡単にはやっつけられない。ただこれ、欧米に近いスタンスを取る日本の論評では、「極悪のテロ集団 やっつけなければいけないが 簡単にはやっつけられない IS アルカイダ」ということになるのだけれど、彼らにしてみれば、15, 16世紀ごろから傷めつけられ、苦しめられてきたヨーロッパ人、キリスト教徒たちに対して、こういう戦法、方法なら対等に戦える、これなら文明国に勝てるかもしれないということだろう。日本の戦国時代でも弱小国が大国に戦いを挑んで勝利するためには奇襲・ゲリラ・隠密作戦・風評作戦というようなことは常識だっただろう。歴史を振り返れば、ヨーロッパ人はヨーロッパ以外の土地の人間に対して過去に何をしてきたのかを考えれば当然の報いかもしれない。「わが国の植民地になったおかげで 君の国は 文化文明 道路に学校が できたではないか 今でも使っているではないか 現地人にとって いいことばかりじゃないか」と平然という人と接したことがあるが、この人たちは人の人権・尊厳・民族・伝統なんてことを考えおもいがけないのか、おろかな人たちだ。弱者の痛みを知れ、強者は一步も二歩も譲る、というようなことをいっていると、花でせせら笑われそうだ。

戦わないこと、「不戦の誓い」これは本当に大事なことなのだ。「IF」「もし 他国が 攻めてきたら」「もし 日本が 戦場になったら」という「IF」を多くの人がいう。戦っても、戦わなくても、ヒトはほろんでいく、組織も街も国も同じようにほろんでいく。「不戦の誓い」攻めない、戦わない、絶交しない、ということではいけないか。

これと同様、今、世間で脱原発がかしましく騒がれているが、オレは「核廃絶」という。原子力発電所より核兵器の方がもっと恐ろしいのではないのか。世界中に存在する核物質をいかに処理するか、「終わりにする」という行動・技術こそが大事なのでは。原子力発電所も、各国が持っている核兵器もこれはどうするの。村上隆著<金・銀・銅の日本史>：人類が掘り出した金属、人類が造った金属製品、それらのデータは、1000年2000年ぐらいしかない。半減期の長い放射性廃棄物を土中深く隔離するにも、有効な種々のデータがない。核のエネルギーを取り出す技術があっても、廃棄物処理技術がないのは、おかしいよね。

まもなく今年が終わる、一週間もたつと正月が来る。みなさんの会話に出てくる話だが「年のたつのは早い このあいだ 年の初め」といっていた もう次の年が 近づいてきている」というような会話が耳にはいってくると、ヒトごとではない、じつはオレもそう実感しているのですよ、とつぶやいてしまう。若いころに比べ 50 歳代 60 歳代は 10 年単位で流れていってしまう、これは自身の生き方暮らし方が同じスタイルになってきた、変化がなくなってきた、そういうことが原因で、同じ日々の繰り返しには身体も脳も新鮮さを失い、日常が早々と過ぎ去ってしまうのではないかな。小説に出てくるような波乱万丈の人生を歩んだヒト、上下左右に翻弄され続けたヒトはそう簡単には日はたつてくれない、ということがあるかもしれないがオレの周りにはそういうヒトはいない。

今年を振り返って、つきなみな話だが年相応に体力・気力・持続力・忍耐力が衰えてきた、しばらく前までは「衰えてきた」とかあく笑ってすませていたが、本当に衰えてきた、衰えを実感するようになってきた。毎日河原にでむいて走っているが、その走り方が歩くよりは少し速いという状態、前のほうを早足で歩いているヒトを見つけ、「すぐに追いつく こちらは走っているのだから」というせりふは少し前までの話、今はなかなか追いつかない、普通に走っている方々にどんどん後ろから追い抜かれてしまう、飛ぶように軽快にすり抜けていく華麗な姿を横にみながら「これで じゅうぶん」と“ぼそり”走っている。この走り方だと 30 分や 1 時間走っても疲れないし、息も切れてこない、これではいけない、もう少し昔の「は～は～ぜ～ぜ～」をとり戻さなければとわずかの間スピードを出すけれど、持続できない。ただこの“ぼそり”のおかげで、山に登ってもまだまだ疲れない、登りも下りも足が動く。

今年はいくさんの山に登ったねと思い出す。南アルプス仙丈岳は無事てっぺんに行けた、北アルプスの槍ヶ岳は雨天のためてっぺんには行けなかったが、楽しいところまでは登れた。近畿の低い山もたくさん登れた。1 週間前には京都の低い山、初雪を踏みしめた。大阪を出発したときには陽が昇っていた、楽しい一日になりそうだとくいきしてしたが少し長いトンネルを抜けると小雨が降っている。まさかの雨、天気予報では日本海側は雨模様と出たはいたが内陸部でも雨か、この雨は晴れるよねと思いつつ 1 時間少し走ったが同じような小降りの雨が降り続いていた。登山口で雨具を着込み「峠まで行こう」と歩き出した。10 分も登るとかすかに雪がみえかくれ、もう少し上は 10 センチ 20 センチと積もっていた、相変わらずの雨が降りあたりは暗く雨の空やみそうにない。地面はまっ白、木の幹・枝・葉は雪を乗せて雪の景色が感嘆の世界が、身体はほてって暖かい、雨がやめばこのままいけるのだが、と思いつつも 2 時間ぐらいの散歩で降りた。アイゼン・ピッケル・ワカンを出して雪の中を歩きに行かねばと心は騒ぐ。

おかげで絵もたくさん描いた。いまさらながらいうのも恥ずかしいが「いくらでも 描ける」「どんどん 描ける」とうれいしい状態、「オレの絵が うまく いっているのでは」「描けるように なったのでは」「オレの絵が できあがって きたのでは」「オレのスタイルが 決まってきたのかな」とほくそ笑んでいる。何年か前までは「うまくいったぞ」と思わず悦びがこみあげてくるような瞬間なぞ一年に一回ぐらいしかなかった、それが季節ごとぐらいに多くなり、最近には月に何度かちょくちょくほくそ笑んでいる。大きな声ではいえないが、この“ほくそ笑み”はオレの人生最高のいただき物と思っている、ありがたいことだと思っている。こんな状態が二十歳代にあったならオレももう少しは売れていたかもしれないねと笑いながら「ゆ～は 売れないのに 次から次に 描くねえ それは感心だねえ」などと廻りから揶揄され日々在庫を増やしている。50 年もやっていればあらゆる技法、試みをやってきた、材料や絵の具のこと、筆の使い方・走らせ方のこと、どんな絵が好きでどんな絵が描きたくて、というようなこともいろいろ頭の中を駆けめぐる。最初からこういう画風は描けない描かない、こういう画風は嫌いだ、こういう画風はオレとは異質で忌避すると近づかなかった。いろんなことを知っている、試してきた、この世界のことはおおよそ見てきた、そんな話は格好が悪いので、これぐらいでやめておこう。そういえばオレはヒトのことを聞けなかったね、頑固だったね、デカダンスだったね。(デカダンスという言葉改めて調べた：フランス語：退廃。文化的爛熟の果て。いわゆる世紀末。ヨーロッパで 19 世紀末にキリスト教的価値観に懐疑的で芸術至上主義的立場の人たちの叫び。)(オレの場合のデカダンスは、社会に向かってまじめに取り組まなかったヒトだった、ぐらいの意味かな)

15-088 高見山 301215

あおい空 あおい空だ

ほんとうは 日本海側の山に行こうと思っていた

天気予報は ずっと雨 ずっと雪

それじゃ 反対側 太平洋側の方に来た

去年と同じ日に 登っている人の写真がある まっ白な雪の中を登っている

今日は雪もない 霜もない 土の中にツララがみえる

着替えているときは風が寒い 歩き始めると暖かい ぽっかり陽射し ほわり風

久しぶりの暖かさ 兵庫の置く 京都の奥 滋賀の奥 冬は曇る日が多いのかな

てっぺんには 霧氷がある 樹の 枝に幹に 氷がへばりついている

風に吹かれて 白い氷が鋭くへばりついている

樹の国 山また山がぼこぼこ あちらもこちらもぼこぼこ

台高の山（奈良と三重の県境：大台と高見の一字を取っている） 大嶺奥駆道の山 見える 連なる

濃いみどり スギやヒノキの濃い緑が連なっている

てっぺんは広葉樹 右に左に立ち上がる 今はほとんどの樹が 葉を散らしている 枝の向こうに あおい空

枯れた草 小さい葉を茂らせている小さい樹 しぼみかけた真っ赤な実をつけた小さい樹

向こうの方に 今年なんどか来た山々が白く見える 明神 檜塚 ここと同じように 霧氷だ

熊が出没しています と大きな看板 くまくん もう寝ているかな 1週間前にいった北京都の山

手のひらの大きさの足跡があった うすく積もった雪の上にどしり まだ寝てないかな オレの鈴 チリンチリ

ブナの木 若々しい 元気だ 立派だ まだまだ大きくなりそう 100年 200年と立っているかな

ブナは地味な木 だけどなんだか惹かれるネエ ブナ以外に驚くような木がいくつもある そういえばトチノキもい

いねえ 実が食える クリも実が食える 人々は大事にしてきた山の木

山のどこがいいのと聞かれたら なんで登るのと聞かれたら しんどくないのと聞かれたら

山を登るには地面を見て登るのがいい ひたすら地面を見る これがいい

空も風も樹もいいけれど 地面がいちばんいい 土を見ていると 世界が見える 地球が見える

右足を 左足を 一歩ずつ ただ歩く それがいい ただそれがいい ツマラネエヤツ といわれても

白雲に 峯はかくれて 高見山 見えぬもみちの 色ぞゆかしき 本居宣長

このみちは昔の国道じゃないの 昔 バスが トラックが 馬車が 牛車が リヤカーが と調べてみる

30年前に高見トンネルができるまでは立派な国道だったそう。それ以前、伊勢街道、紀州和歌山藩の参勤交代としても使われた高見山越えの峠。国道166号線の最難所としても世に知られていた。麓から500メートルの垂直距離を登る三重県側は関西随一の規模だったそう。宣長は、晩年紀州徳川藩に召し抱かえられ、松阪からここを通った。

高見山：伊勢街道を伊勢に向かって国境のトンネルを出るとすぐに右へ 地道をくねくね車で これはどうも昔の国道 トンネルができるまでは車が行き交っていた山道 高見峠というところまで入れる 大きな駐車場・トイレそこを登っていくときれいに整備されたハイキング道 1時間足らずで頂上に着く 霧氷がある 樹氷がある この違い知っているかい 霧氷とは木の幹や枝についた氷 氷点下のときにできる 樹氷は霧氷のひとつ